The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高等学校・英語科授業における英語の補部構造の教授に関する一提案 ： 事態の結束性と記号上の距離に焦点づけて
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	大阪大学教育学年報. 2018, 23, p. 169-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高等学校・英語科授業における英語の補部構造の教授に関する一提案
―事態の結束性と記号上の距離に焦点づけて―

岡　田　禎　之

要旨

英語の動詞補部に単に目的語名詞だけが来るのではなく、別の動詞が選択される場合、そこには２つの出来事が存在する。主節の動詞と補部の動詞の間には、様々な要素が介在しうるが、両者の記号上の距離が大きくなるにつれて、２つの出来事の間の関係性は薄れていく、という相関性が認められる。これは言語類像性の原理の一つとして提案されている近接性の原理（proximity principle）を具現する事例と考えられる。このような観点から動詞補部の構造を見ていくことによって、なぜ知覚動詞の補部に原形が用いられ、that節が用いられないのか、といった問題に一つの回答を与えることが可能となる。動詞の補部構造をただ闇雲に覚えるというのではなく、なぜこの表現形式が選択されるに至ったのかを考える上で、一つの指針を示すことができるのではないかと考えられる。高等学校での英語授業の一環として、このような観点からの説明を加える機会があれば、生徒の文法に対する考え方にも少しは変化を与えられるのではないか、と筆者は期待するものである。

本文

高校生の時に英文法の授業で、「原形を取るのは使役動詞と知覚動詞」であるとか、「tellはto不定詞を取ると命令に近い意味になり、that節を取るときはただ発言するという意味になる」とか、「that節の動詞が原形になるのは、提案、要求、主張などを表す動詞である」とか、事実関係としては正しいとしても、これらの事象をただばらばらに教えられた記憶が筆者にはある。何故そうなるのだろう、と思いながら、闇雲に覚えさせられて、文法がいやになってしまう生徒もいたと思われる。文法など不要だ、という声もあるかもしれないが、少し英語の記号化のあり方を示唆してあげることだけでも、言葉の使われ方に対する見方は変わるのではないかと思われる。

ここでは、言語形式と、それが表す意味内容には、密接な対応関係が存在するという言語類像性（iconicity）の考え方の中で提唱されている原理の１つである、近接性の原理（proximity principle）を利用することで、動詞が取る補部の形式選択の問題を考えてみたい。それぞれの動詞がなぜこの特定の補部形式を取るのか、補部形式の形が異なることによって、なぜ意味が変わってくるのか、といったことについて考える際に、一つの視点を提供してくれるものであると思われる。動詞の補部形式についての補助教材資料として、このような話も授業に加えてみるのも良いのではないか、と筆者は考えている。

以下、１節で近接性の原理を紹介し、２節で、動詞の補部構造についての分析をおこない、３節をまとめとしておきたい。

1. 近接性の原理について

Givón（1993）は、概念的な近接性が記号上の距離にも反映される、という「近接性の原理」に基づいて英語の補部構造を分析している。「近接性の原理」は、言語類像性（iconicity）の１つの原理として提案されているものであるが、以下のような定義付けがなされている。

（1）The proximity principle:
Entities that are closer together functionally, conceptually, or cognitively will be placed closer together at the code level, i.e. temporally or spatially.（Givón 1990, p. 970）

機能的、概念的、認知的に近しい要素は、それを記号化する場合にも（発話の場合）時間的に、もしくは（文字表記の場合）空間的に近い位置に配置される、という考え方である。会話文の例を一つ挙げると以下のようなものが、この原理の具体事例と考えられる。

（2）A. How much is 100 and（*'n' ; *ϕ）22?
B: One hundred and（'n' ; ϕ）twenty-two.（Haiman 1985, p. 102）

Aが大人の、Bが子供の発話であるとして、Aではandという接続詞を弱化させたり、省いたりすることはできないが、Bでは弱化させたり、省略させることができる。むしろそうするべきである。Aの発話では「100」と「22」は、個別の概念であり、その２つの概念を接続するために、andが用いられている。Bでは「122」という１つの概念として提示する必要があるので、接続詞andはむしろ邪魔である、と考えられる。少なくともBの発話においてandを強く発音するのは、かなり変である。２つの数字概念が、意味的にも近しいまとまりである場合、記号上この２つの記号を分断する接続要素はなくなる、もしくは弱化されることになり、近接関係に置かれることになる。

（3）a. Many arrows [didn't hit the target].
b. [Not many arrows] hit the target.（Imai et al. 1995, p. 45）

（3a）は、「多くの矢」に関しての話であり、これが的に当たらなかった、ということを主張している。的に当たった矢に関しては何も語られていない。通常の推論からは、当たった矢の数は少なかった、という含意が生じるが、これはあくまでも含意であるため、当たった矢の数も多かった、ということもあり得る。

（3b）は、的に当たった矢に関する話であり、それが、「多くはなかった」ということを伝えている。当たった矢の数は少なかったが、当たらなかった矢の数については不明である。当たらなかった矢が多かったという含意はあるが、これも否定することは可能であり、当たらなかった矢も少なかったのかもしれない。

（3a）と（3b）は、表している事態が異なるが、これは否定辞notが何を否定対象として選択しているかの違いによる。前者は動詞句の事態を否定し、後者は数量詞manyを否定している。否定辞と否定対象は直接関わる要素であるだけに、記号上も近くに配置されることがこの事例からも見て取れる。

（4）a. the famous delicious Italian pepperoni pizza

b. *the Italian delicious famous pepperoni pizza
c. *the famous pepperoni delicious Italian pizza
d. *the pepperoni delicious famous Italian pizza（Ungerer & Schmid 2006, p. 302）

前置修飾形容詞の配列のあり方にも様々な提案がなされているが、一つの要因として考えられるものが、修飾対象となっている主要部名詞との意味関係の強さ、というものである。pepperoniはピザの材料である辛みの強いソーセージであり、ピザの種類を限定する要素である。Italianも、ピザの種類を限定する要素でありNew York styleやWest coastなどの他の土地が発祥のピザとは異なる、ということを表すが、ピザを構成する直接的な材料要素を表しているわけではなく、この点において、ピザという料理との関連性はより希薄になると考えられる。これに対して、delicious, famousはピザに対する評価形容詞ではあるが、ピザの種類を表すわけではなく、より一般的な評価を付加する修飾要素である。なかでも、deliciousは、主に食品類に対する評価形容詞であり、famousは、食品に限らず、広範囲の事物に対する評価形容詞として機能する要素である。このような状況で、ピザという食品との関係性がより強い表現がこの主要部名詞に近い位置に配列され、より関係性が弱くなっていくにしたがって遠い位置に配置される、という関係が認められる。この関係性が保持されない（4a）以外の配列はすべて、容認しがたい配列であると判断されることには、近接性の原理が働いていると考えられる。

2. 動詞の補部構造

以上のように、近接性の原理は言語の様々な要素間の関係に認められる原理であるが、動詞の補部構造を考える上でもこの考え方は有効であると見なされている。ここでは、以下のような主動詞と補部動詞の関係について考えてみたい。

（5）a. She made/had/let him **shave**.
b. She told/asked/ordered/wanted him to **shave**.
c. She would like for him to **shave**.
d. She requested/insisted/proposed that he **shave**.
e. She agreed/suggested/said that he should **shave**.
f. She said/told/thought that he had been **shaving** at 8 this morning.

ここでそれぞれの文には、下線と太字で表した２つの動詞表現が登場している。つまり、２つの出来事が存在していることになるが、その２つの出来事の意味的な近接性が、そのまま記号上の２つの動詞部の距離にも表れていると考えるのである。

2.1 原形補部と不定詞補部

（5a）は強制力の強い使役動詞のタイプ（make, have, let）が見せる形式であるが、これらの動詞の特徴は、使役的な働きかけ（たとえばmakeによって表示される出来事）と、それに応じて彼が行う行為（shave）の間に、タイムラグが少ないということである。これらの使役動詞は含意動詞（Karttunen 1971）と呼ばれるが、使役的働きかけが成り立つと、サブイベント（shave）も成り立つことが保証されている。

(6) She made him shave.が真のとき、He shaved.は真である。

つまり、彼女が働きかけを行ったのが過去時の事象であるなら、彼がひげを剃ったのも過去時の事象である、という関係が成立している。この時間関係がより明確なのは知覚動詞である。

(7) She heard him **sing**.

ここでは、彼女がheardした時間と、彼がsingした時間は絶対的に同時である。singingのように現在分詞を用いることもできるが、この場合もheardが指している時間において進行中であった、という進行相の情報が付け加えられてはいるが、主節の出来事が生起したのと同時間に生じている事象となる。このような場合、サブイベントの動詞に独立した時間標識を与えることは言語経済的に無駄なことと考えられる。時間情報などをそぎ落とした原形を提示しておけば十分なのである。

次に（5b）のto不定詞を取るタイプ（tell, ask, order, wantなど）であるが、このタイプはほとんどが含意動詞ではない。つまり、tellなどが表す働きかけの出来事が成立しても、必ずしもサブイベントが成立するとは限らない。

(8) She told him to shaveが真のとき、He shaved.は必ずしも真であるとは限らない。

彼女は彼に対して直接働きかけている（この関係が、主語と目的語という同じ出来事に参与する２者という関係で記号化されている）が、これが必ずしも功を奏するわけではない。彼女は、彼にshaveするように（その方向に向けて）働きかけを行っているのみであり、サブイベントは目標となる行為でしかない。この関係性は、前置詞toによって表されている。同時に起こる出来事ではなく、働きかけの後で、それ以降に起こる（かもしれない）目標行為であり、タイムラグは（5a）のタイプよりも大きくなる。この概念的な近接性の弱化は、記号上の距離にもtoを介在させるという形で反映されている。

また、このタイプの補部構造を取る動詞で含意動詞であるものには、cause/forceがあるが、これらの動詞は、主節における働きかけと、補部における出来事の間にかなりの時間的な差異があっても良いものであり、タイムラグが認められうる(9)。またforceには顕著であるが、「無理に強いてやらせる」という行為には、補部の動作主体（主節の目的語要素）が強い抵抗を見せていることが含意され、それだけこの参与者の動作主体としての独自性が発揮される余地があるということになる。

(9) a. John's behavior **two years ago** caused Mary to finally quit her job **yesterday**. (Givón 1993, p. 11)
b. John forced Mary to do the dishes, but it took hours before she did so.

make, have, letなどが、主節主語が事態をコントロールしている度合いが強いのに対して、cause/forceの場合は、主節主語が事態をコントロールしている側面もありつつ、同時に補部の主語（主節の目的語）が意思を発揮できる余地が残されていると言うことになってくる。その顕著な場合が、主節主語の働きかけに逆らって、求められている行為を行わない、ということであり、非含意動詞類にそのような特徴が認められるといえる。ここには、別個の動作主体が認められることになり、それだけ２つの動詞が表す出来事は事態としてのまとまりを欠いてくることになる。別々の動作主体が行う別々の出来事であるという意味的側面が現

れてくるのであり、それが記号上はtoという記号を介在させ、２つの動詞が表す出来事の間に距離ができることに対応していると考えられる。

ところで、上記のような概念的な結束の強さが、記号上の２つの動詞間の距離に反映されているのではないか、という発想は、英語だけではなく、フランス語の補部構造にも認められるものである。

(10) a. ??Jean laisse Marie partir quand il veut. (VOV)
(John lets Mary leave whenever he wants.)
b. Jean laisse partir Marie quand il veut. (VV)
c. Jean laisse Marie partie quand elle veut. (VOV)
(John lets Mary leave whenever she wants.)
d. ?Jean laisse partir Marie quand elle veut. (VV) (Achard 1996, p. 339)

フランス語の使役動詞laisser（英語のletに相当）は、目的語と補部動詞の語順入れ替えが自由で、SVOVとSVVOの両方の語順が利用可能であるが、ここで主節の主語が事態をコントロールしている強い使役主体であれば（(10a, b）では、whenever he wantsという表現によってJohnの意思によって事態が支配されていることが分かる)、SVVOの形が好まれる。２つの動詞が隣接してひとまとまりになり、１つの動作主体(John)と、１つの被動作主（Mary）の間に起こった一方的な使役動作であることが、表現形式に反映されていると考えられる。このときJohnはMaryを「行かせる」のであり、Maryは意思を反映させることのできない単なる被動作主である。これに対して、Maryの意思に基づいた行動をJohnが「許す」という場合（(10c, d）では、whenever she wantsという表現から、Maryの意思に基づく行為であることが分かる)、SVOVの形式が逆に好まれる。ここにはJohnとMaryという２つの意思を持った動作主体が存在し、２つの動詞が表す出来事の、事態としてのまとまりは弱くなる。このとき２つの動詞は切り離され、それぞれの動詞が意味上の主語を持つ、というSVOV形式になるのである。２つの動詞が表す動作が１つの動作主の元に集約された強い使役的動作か、目的語参与者の意思を生かすことを許す弱い使役動作であるのかによって、動詞が表す２つの事態の結束度合いには違いが生じ、それが記号上の２つの動詞の間の距離として表れている、と考えることができる。

また、強い使役関係を表すfaire（makeに相当）の場合は、主動詞と補部の動詞は隣接する形態しかなく、SVVOの形式しか取らず、forcer（forceに相当）の場合は、逆にSVOVの形態しか取らないことも、これまでの話の内容と共通するものであるといえる。

(11) Marie fait danser Paul.
(Mary makes Paul dance.) (Achard 1996, p. 333)
(12) La situation économique a forcé Marie à renoncer à ses vacances.
(The economic situation forced Mary to cancel her vacation.) (Achard 1996, p. 336)

なおこの近接性の原理という考え方は、言語処理の観点からHawkins (2009) が唱えるMinimize Domains（意味・統語的依存関係を認定するために必要となる言語記号領域はできる限り小さくすることが望ましい）と通底すると考えられる。関連する記号が近くに配置されることは、処理のために必要とされる記号領域を小さくすることに貢献するはずだからである。

2.2 For---to---型の形式

これまでの事例では、目的語は、主動詞の表す出来事の直接的働きかけの対象（つまり、主節主語と目的語で指示される両者は、同じ時間と場面を共有する参与者）であると同時に、補部動詞の意味上の主語である、という２つの機能を持ち、主節と補部節の境界は曖昧であるが、that節を取るタイプは、主節と従属節がthatという補文標識を介在させることによって明確に分断されているという違いがある。この両者の中間的位置にあるのが、for---to---型の表現になる。このタイプを取る主動詞は少なく、arrange/ask/would like/sayなどが挙げられるが、主節主語の働きかけはかなり間接的なものになり、補部の意味上の主語と同じ時間、同じ場所に存在する人物であるという保証はなくなる。

(13) a. He arranged for her to be interviewed first. (Huddleston & Pullum 2002, p. 1182)
b. She said for you to come at 8:00. (Givón 1993, p. 33)

例えば（13a）では、彼と彼女は直接面識がない２者であることも充分考えられ、主節と補部の出来事は時間的にも、場所的にも重なりの少ない別々の事態である可能性が高くなってくる。forはbenefactive（受益者：～のために）という関係を表し、主節の要素としての機能も持ちつつ、同時に不定詞の意味上の主語を指定するための要素でもあるため、ここに補部節が始まるという境界を設定する要素としても機能している。これまでの事例では、目的語は主節の出来事と補部の出来事に共通する参与者であり、かつ主節主語と時間と場所を共有する参与者であったが、for--to--型ではこの関係は薄れ、主節主語との関連性は弱くなる。この分だけ、主節と補部節のつながりも弱化しているといえる。これがforをさらに介在させることによる、２つの出来事間の距離の大きさに対応しているのである。

(14) a. *She asked him to bring in the file, but they couldn't find him.
b. She asked <u>for</u> him to bring in the file, but they couldn't find him.
(15) a. *She sent him to buy supplies, but they forgot to tell him.
b. She sent <u>for</u> him to buy supplies, but they forgot to tell him. (Givón 1993, p. 34)

forが介在しない場合、彼女と彼は直接同じ場所、同じ空間にいる２者であり、直接的な働きかけが行われているが、forを介在させることによって、その働きかけは間接的になり、別の第３者を介しての働きかけであっても良いことになる。このため、(14b)（15b）のように、theyで示されている第３者が仲介するような働きかけでも、forがある場合には問題がなくなる。(14a)（15a）が求める、直接的な２者の関与は必ずしも必要ではなくなるのである。ちなみに、(15b）にあるsend for---というフレーズは、これだけで独立させても「---を呼びにやる」という意味を持ち、第３者を介在させることで斜格目的語要素に対する働きかけを行う、という意味を持っていることは興味深い。

2.3 不定詞補部とthat節補部

不定詞補部の事例と、that節補部の事例では、後者の方が明確な節境界（接続詞のthat）があることから、事態のまとまりはなくなると述べたが、これを証明するためのデータを少しあげておくと、以下のようなものが考えられる。

(16) a. I want you to stop harassing her, immediately!
b. ?I wish that you'd stop harassing her, immediately! (Givón 1993, p. 17)

希望を表すwant/wishで補部の形態を変えてみると、immediatelyという副詞表現との共起には容認性の差が認められる。「即刻、今すぐに」という意味の副詞が用いられているということは、話者と聴者は同じ場面にいる２者であり、直接的な関わりを持てる２者である、ということを表している。このような場面においては、youは主節の働きかけの直接的対象であり、主動詞の目的語として表現され、それと同時に補部節の意味上の主語である、という機能を帯びることが望ましい。(16b) のようなthat節補部を取る形態では、主節の出来事に直接関与する参与者である、ということが明確に伝わらないことになり、不適切と判断されるようである。

(17) I expect you to be done by noon,
a. .....so get on with it!
b. ....?if you don't mind.
(18) I expect that you should be done by noon,
a. ....?so get on with it!
b. ....?if you don't mind.
c. ....if everything goes on schedule. (Givón 1993, p. 17)

(17)(18)も類例であるが、「昼までに仕事を終えてもらいたい」という依頼を直接聞き手に述べて、強く働きかける場合には、(17a)のような表現が後続する方がふさわしいと感じられるようであるが、同じ希望をthat節を用いて表現する(18)では、働きかけの度合いは弱いものと考えられ、(18c)のような表現が後続することが自然と判断されるようである。ここでは、同じexpectという主動詞を用いて希望が伝えられているが、補部節の構造が異なっている。この選択が異なるだけでも、相手への働きかけの度合いには違いがあると見なされるようである。

2.4　that節補部タイプの比較

先述の通り、that節を取るタイプは、主節と従属節がthatという補文標識を介在させることによって明確に分断されている。従って、主節の出来事と従属節の出来事は明確に別々の出来事として区別することができ、２つの出来事に共通して関わる参与者も存在しない（たまたま主節主語と補部節の主語が同一人物であることはあり得るが、これは必然的な関係ではない）。(5a)から(5c)までの事例では、主節の目的語やforの目的語の斜格要素が、同時に補部節の意味上の主語になっていたので、２つの出来事に共通して関与する人物が存在しており（for--to--型では「かろうじて」ということにはなるが）、その点で２つの出来事には共通性も見いだせるし、関連を認めることができるが、この観点で２つの出来事の間の関係性はthat節補部を取る場合の方が更に弱くなるといえる。しかしこのグループ内でも、出来事の関連性の相対的な強さには差異が認められる。例えば、補部節の時間を表すマーキングは、(5d)から(5f)へ下がって行くと豊かになっていくのである。

さて、ここではthat節補部が原形をとる場合と助動詞shouldなどをとる場合（(5d)と(5e)）の比較から考えてみたい。この２つの表現タイプに関してだけでも制限があり、あらゆる主動詞がどちらにでも利用可能

となるわけではない。

(19) a. John requested that Mary do the dishes.
b. John requested that Mary should do the dishes.
(20) a. *John agreed that Mary do the dishes.
b. John agreed that Mary should do the dishes.
(21) a. *John said that Mary do the dishes.
b. John said that Mary should do the dishes. (Givón 1993, p. 19を改変)

高校文法でよく語られることであるが、補部の動詞が原形になるのは、「提案、要求、主張」などを表す主動詞の場合に限られる、とされている（(19a)と(20a), (21a)を比較のこと)。この動詞群は、主文の主語が補部の出来事が速やかに成就することを求めているタイプである、ということもできる。現実として出来事は成就していないものの、理想的にはタイムラグが少ない形で事態が成立することを望んでいる、ある種の切迫性が認められると思われる。このとき、補部の動詞自体に時間情報を付加する必要性は少ないといえる。(もちろん、直接的な使役動詞などに認められるような強い物理的切迫性ではない。主節主語と従属節の主語はそもそも同じ時間、場所に存在するものとは限らず、両者の間には何らの関係性も認められないかもしれないのであるから。あくまでも主節主語の心理的な切迫性という、客観的にみれば弱いものでしかないが、that節補部を取るグループ内での相対的な比較の問題であると考えたい。)

(20), (21)のようなagree/say等の主動詞の場合、補部の内容は主文の主語が主体的に求めている事態とは限らず、他者の希望であるかもしれない（agreeの場合は、他者の希望であることが明確である)。このような場合、理想としては補部の事態がもたらされるべきである、と考えていたとしても、そこには「提案、要求、主張」の動作に認められるような切迫性は感じられない。このとき、主節の出来事と補部の出来事にはタイムラグがありえて、未来志向の表現が補部内容として登場することになる。ちょうど、(5a)から(5b)へのシフトにおいて、原形からto不定詞へと変化していったのと平行するように、ここにはshould等の限られた助動詞表現が挿入されることになる。このとき主節動詞の制限は緩和され、「提案、要求、主張」以外の動詞でもこのタイプの補部を選択することが可能になる(20b)(21b)。

ここまでは、主文の働きかけが行われる時点において補部の内容は現実としては成就していないので、すべて主文の出来事と同時かそれよりもあとに補部の出来事が遂行されることになり、未来志向の出来事に補部の内容は限られているタイプの話であった。しかし、認識や発話を表す主動詞は、補部にこれらの出来事しか取らないわけではない。直説法表現では補部要素として様々な時制の表現が登場し、過去のことであれ、未来のことであれ、実現しないと思われる出来事であれ、様々な時間における事態を表現することができる。これは(5f)のタイプに相当する。

(22) a. John saw/realized/said that Mary had already come out.
b. John saw/realized/said that it would be a while before Mary came out.
c. John saw/realized/said that Mary would never come out. (Givón 1993, p. 15を改変)

このとき、補部の時間情報に何ら制限はなく、どの時間帯の出来事であっても描き出せるような時制や相の表現を利用できる環境になっている。知覚動詞のseeが原形（もしくは現在分詞）しか取らない、という非

常に強い制限を受けていたのに対して、認識動詞のsee(22)は、「分かる、理解する」ということであり、その補部の形式には、どの時間帯の出来事にでも対応できるような時制節形式が用意されている。ここに原型不定詞を置いたのでは、描き出すべき事態のバリエーションに全く対応できない形態でしかない、ということになる。これは必要に応じた実に合理的な文法形式の対応関係であると見ることができる。

さて、(5)にあったGivónがcomplementation scaleと呼んだパラダイムをもう一度上から眺めてみると、最初は補部の動詞には時間情報は付加されていないが、だんだんと時間情報が豊かに付けられる形になったり、主節と補部節の間を明確に区分する境界設定の表現が登場するようになったりしていく。最初は2つの動詞が距離的に近い位置におかれていたが、だんだんとそれぞれの動詞が別々の時間を表せる形式に整えられていくに従い、ばらけていく。それに伴って2つの動詞の間には様々な要素が介在していき、記号上の距離が大きくなっていく。このように2つの出来事の関係性が弱くなり、ばらけていくにしたがって記号上も離れていくという関係には、言語形式が意味を表すために存在する、という密接な意味と形式の対応が見て取れるのである。

2.5　complementation scaleの最下段

ここでは(5f)までしか例文を出していないが、このcomplementation scaleと呼ばれたパラダイムには、更に下位の部分がある。(5)に関する話の最後として、少しだけその事を述べておきたい。

(23) a. He's back, **I hear**.
　　b. It's raining back East, **they say**.
　　c. She's finished, **I see**.
(24) a. **(I) think** she's there.
　　b. **(Do you) think** she'll show up?
　　c. **(I) bet (you)** she's gone.
　　d. **(I) guess** you were right. (Givón 1993, pp. 37-38)

(23)にあるように、発話動詞や認識動詞は挿入節として用いられたり、(24)にあるように、主節の主語（さらに、場合によっては目的語まで）が省略されるなどして、文の形式を保持しない形でモダリティーを表すためのマーカーとして利用されるという現象が起こる。これは特定の表現形式が繰り返し利用されることによって意味が弱化していき、主節としての形式を保持できなくなっていった結果と見ることもできる。たとえば、(23a)では「恐らく」という意味の挿入表現として用いられるのはI hearであり、you hear/he hears/she hears/they hear等の表現が用いられるわけではない。その他の表現に関しても、特定の代名詞主語と特定の動詞の組み合わせが、モダリティー表現として確立し、修飾要素に格落ちしていることが分かる。

(5a)では、主節が描かれた出来事をコントロールしている度合いが強く、補部を取り込んで一体化していた。それから少しずつ補部が形式を整えていき、主節からは独立した節を形成できるようになっていくが、その先には、主従の逆転現象があり、むしろ補部の方が中心的な要素と認識され、主節が従属要素化したり、単なる意味修飾要素になったりするということが生じている。

このように本来主体であったものが従属要素になり、従属要素であったものが主体の地位を獲得して地位が逆転する、といった現象は、文法化には良く認められることである（たとえばbe going to Vは、本来主動詞であったgoingが物理的な移動を表していたところから、時間的な移動のみを表すように意味が希薄化

し、補助要素化していき、これに伴って元々従属要素であった不定詞表現が主動詞の地位を獲得していった、とされている。最終的にはbe gonna Vといった縮約形が登場することになり、be going toの助動詞化が進んだことが見て取れる（Hopper & Traugott 1993））。このcomplementation scaleにもこのような言語変化の一端を見ることができるというのは興味深いことである。

3. まとめ

このように考えてみると、動詞の補部構造は非常に合理的な形で形成されているとみることができるようになる。使役動詞や知覚動詞は原形を取るが、それは原形以外の形にして時間情報を付加する必要性がないほどに、主部動詞と補部動詞の出来事が密接に関連しているからである。ここにthat節を利用することももちろん論理的にはあり得て良いはずであるが、そのような時制情報を豊かに活用できる形態を持ってくること自体が無駄なのである。

tellはto不定詞を取るときは命令に近い意味になると言われるが、このとき主語と目的語が直接関わる２者として登場し、そこで前者が後者に目標となる出来事を述べることで、その方向に向かわせようとする、という働きかけが存在しているのである。これに対してthat節を取る形になれば、２者は同じ場面に存在する必要のない、直接的な関わりがなくても良い２者になり、主節主語が補部主語に関する意見を述べる、というだけの関係性になってしまう。このとき不定詞を取る形式の方が、より強い操作性を持って主語の参与者が目的語参与者に接するという関係を表したとしても何ら不思議はない。その関係性の違いが「命令する」と「述べる」の解釈の違いになっていると考えられる。

「提案、要求、主張」の主動詞においては、that節補部の内容が実現することに向けての主節主語の切迫性が認められ、タイムラグを想定する必要がない。このとき、補部節に豊かな時間情報を与える必要性はなく、原形を用いる以外の形態を用意しなくても良い。これに対して、他の意味を表す主動詞の場合には、タイムラグを想定しやすかったり、補部の出来事が生じる時間関係に制限がなくなったりしていくために、補部節の時間情報が豊かになっていく必要がある、と考えられる。そうしなければ、潜在的に描き出すことが可能な状況のすべてに対応できないからである。

このように考えると、動詞が取る補部の構造は、実に言語経済に適った合理的な形式に整えられていることが分かる。動詞の補部構造について授業で話をする際に、たとえ部分的にであったとしてもこのような視点を導入することで、英語の文構造に対する見方が少しでも変わることがあれば、と願うばかりである。

引用文献

Achard, M. 1996 “Two causation/perception constructions in French.” Cognitive Linguistics Vol.7 No.4, pp. 315-357.

Givón, T. 1990 Syntax. Vol. II. Amsterdam: John Benjamins

Givón, T. 1993 English Grammar. Vol. II. Amsterdam: John Benjamins.

Haiman, J. 1985 Natural Syntax. Cambridge: Cambridge University Press.

Hawkins, J. 2009 “Language Universals and the Performance-Grammar Correspondence Hypothesis.” in Language Universals, eds. by M. Christiansen, C. Collins & S. Edelman, Oxford: Oxford University Press, pp. 54-78.

Hopper, P. & E. Traugott 1993 Grammaticalization. Cambridge: Cambridge University Press.

Huddleston, R. & G. Pullum 2002 The Cambridge Grammar of the English Language. Cambridge: Cambridge University Press.

Imai, K., H. Nakajima, S. Tonoike & C. Tancredi 1995 Essentials of Modern English Grammar. Tokyo: Kenkyusha.

Karttunen, L. 1971 "Implicative Verbs." Language Vol. 47 No.2, pp. 340-358.

Ungerer, F. & H. Schmid 2006 An Introduction to Cognitive Linguistics. 2nd edition. Harlow: Pearson Education Ltd.